

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	少年通信兵學校宿泊訓練記
Author(s)	竹下, 英世
Citation	龍南, 254: 93-100
Issue date	1944-06-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8586
Right	

擧げたる銃は氷るれど

必中の意氣今こそは

彼方の白き標的を

ねらふ眼に燃ゆるかな

五、試験の鞭に技成らば

腕百練の鐵と凝り

必殺の氣は唸りもて

飛びゆく彈丸に生命こむ

いざや塵かむ吾が腕を

うまずたゆまぬ精神とも

六、暗雲こむる混濁の

四海道なき世なりとも

龍南健兒が魂胸れて

精神と技を練りに練る

我等が生命の射撃道

永久に放たむその光

少年通信兵學校宿泊訓練記

通信訓練班

理二 竹下英世

昭和十九年二月二十三日より三月三日迄。此の十日間こそは我
我にとつて最も意義深い期間であつた。少年通信兵學校に宿泊。

溫容にして嚴格な元氣潑刺たる教官殿の下、我等二十名の熱と意氣は迷ひ武藏野の空に龍南の電波は躍動したからである。トツに熱練せる學生が宿泊訓練をうけ、始から實器材で實戰即應の猛訓練をやつたことは少通校（以下略してかういふ）としてもまた全國の學徒としても始めてのことであつたさうである。十五年創立以來龍南人諸兄より非常にお世話になりつゝ育つてきた通信部が此の様に逞しくなつたことを報告して感謝の言葉に代へる。以下の文は一年（現在二年）の諸君が書いた班の日誌を主として筆者がまとめたものである。なほ書くわけに行かない事項も相當あり或は奥歯に物がはさまつた様な所があるかも知れないが濫め御諒承されたい。

□入校

二十三日一〇時三〇分東京着。直ちに宮城前に行き皇居を伏し拜み日本人たる感激に咽んだ。東京にて此の程歸還された部長稻葉先生、また本訓練に参加せんとする帝大の三先輩と會した。十三時東京驛發。少通校に向ふ。

宏々たる武藏野の中、青々たる松林の中に少通校はある。敷地の大なる、五高のあの大きな面積に數倍する。環境雄大にして景色五高と頗に似た所あり。

驛には助教殿が出迎へてをられた。整列、服裝を正して正門へ。正門には擔任官福田少佐以下六人の教官助教殿がこれまた正装して出迎へてをられた。歩調を元氣よくとつて校門をくぐる。「東京陸軍少年通信兵學校」の表札がまぶしい程である。門には國旗を立てゝあつた。後で聞くと僅か十日間にしる「入校」であるから

生徒の入校の時の様にして迎へた。とのことである。たゞ感激。

校長殿に申告。ついで御訓示あり「鐵をもとかす如き熱情に感じて喜んで君達を迎へた。期間は短いが大いに張切つてくれ」と。

内務班へ。周到な準備に驚く。ついで醫務室にて健康診断。次に直ちに官給品貸與、室の整理、各自分擔の物、注意、入浴……と軍隊生活は始つて行く。我々に學課講堂を内務班室、自習室食堂……として用意して下さつたし六人の教官殿は十日間全く我々と起居を共にして下さつた。

■事前準備

少通校に於ては特に「事前準備」といふことをやかましく言はれる。すべてに於てさうであるが特に通信に於ては事前準備の周到であるか否かと任務遂行に重大な影響を及ぼすのである。我々は毎日このことを心の底迄たゞきこまれつゝ、流石さういふ少通校の我々を迎へて下さつた事前準備の細心さに驚いてしまつた。たつた二十名に六人の教官殿。一々手をとつて指導されるのであるから我々の技倆の上達が早い筈である。

内務班室には四十枚の疊が布いてあり毛布は充分暖く二十人分用意してあるし、各自に一つづゝの机には名札迄きれいに貼つてあつた。上靴然り、靴箱また然り。更に壁を見ると我々五高生徒用に内務班心得から不寝番一般守則迄書いて貼つてあつた。正面の壁には教官峰金大尉殿の墨痕も鮮かに

「むらぎものこゝろの限り盡してぞ

生徒の意氣を示してやまむ」

の和歌一首に「禮儀、規律、熱意」「至誠殉皇」の文字がかゝつ

てゐた。

訓練が始つてまた驚いた。無線機も充分用意しておいて下さつたし、修技用としては電鍵、接續紐、受話器から通信教範第二部、電報紙、鉛筆に至る迄二十人分揃へて用意してあつたし眞に至れり盡せりであつた。我等が感激して頑張つたのは言ふ迄もない。

試みに學校生活をふりかへつてみよう。「事前準備」といふ點のみに於ても如何に學ぶべき點が多いことであらう。

□訓練

周到なる事前準備の下、訓練は徹底して行はれた。我等またありつたけの力をそゝいで頑張つた。教官殿、助教殿の懇切なる御指導に對して我等の精進も凄く本當に文字通り教へる者と教へられる者の意氣と熱がぶつつかりあつて火花を散らす程の熱烈な演習であつた。

器材は〇〇式無線機。二十人に對して〇個も貸して訓練された。送受信調整、立ち所に覺えた。と言ひたいが始からはなかくさううまくは行かない。時計の針の進みの早きに歎じつゝ確實迅速なる操作へと努力する。磨けよ磨け我が技術。器材の取扱をカンをできる程迄に覺えるまで二日間、十分や十五分の中休みでは誰も便所に行く者の他一人も休む者はない。夜の自由時間も皆自發的に器材と組んで演練に演練をつづける。二十五日には送受信調整に於て皆始めは十分近くもかゝつたのが殆んど一分以内で出来る迄に至る。教官殿助教殿も感心された。

二十六日土曜、待望の遠距離(といつてもごく近い)訓練。二

組に分れて各組〇分隊。一組はトラツクで關東平野を快々的に疾走して川越へ。川越中學校庭に無線機開設。一組はトラツクならぬリヤカーで無線機運搬、少通校に近い一國民學校々庭に開設。

川越より東村山迄四十軒。絶間ない電波が流れて行く。これこそ我等が不斷の忍苦に練つた龍信魂を心の限りをこめて叩く電鍵の響である。飛電一閃百萬の力。顔こそ見えね、字號の調子で誰が相手になつてゐるか位すぐわかる。堅き團結は電波によつて益益親密の度を加へる。今日は四十軒であるが、これが百軒とならうと二千軒とならうと交す電波に狂ひなし。思ひは南の、北の前線へとぶ。昨日マーシャルの玉碎を少通校のラヂオで聞き悲憤は燃えて血潮沸りつゝある我等。眞剣な電波は一種の殺氣さへ孕んでゐる。峰金大尉殿が言はれた通り通信も氣合である。福田少佐殿が「わしも皆をつれて玉碎の島に行かうか」と言はれた時「はいッ」と答へた皆の意氣である。

二十七日には大型無線機を使用。内地とはいへ遙か北の都市〇〇所在の部隊と通信をさせていたゞいた。流石に混信、空電が多い。こちらでも受け難かつたが相手も然りと見え「雑音多し、受信困難速度を減ぜられたし」等言つてくる。始はなか／＼うまく行かずに困つた。終に連絡のとれなかつた組も一、二あつた。此の時感じたが通信では相手の字のくせですぐ顔が目につぶ位團結しておかねばならないといふことを思つた。教官殿にお願ひして二十八日も一時間對〇〇通信をさせていたゞいたが、此の時は大抵の者は慣れた故かよく行つた。贅澤な奴になると他の者の三倍も送受してゐる。

二十八日。野外行軍、通信分隊教練。器材は各自分擔携行の臂力運搬である。慣れない故か肩にくひこむ。然し全員意氣と熱により無異狀。一時間毎に行軍と開設。大いに興味もあるし熱も湧く。心臓は皆強し、時間になれば民家の縁側に開設して「お世話になりまゝす」。空はきれいに晴れてうら／＼かな春日和である。農家の家の恰好も熊本とかはりない。何か勤勞奉仕にでも來てゐる様な錯覺に捉はれること度々。互に何處を歩いてゐるかは知らないが時間になれば確實に相手の電波がこちらの受信機にお嫁入りするし、此方の送信空中線に流れた數十百万サイクルの振動電流は忽ち周囲のエーテルに歪を與へて波動は相手の受信機を共振させる。打つ電報受ける電報の數々。器材は心よく役目を果してくれる。どこ迄はなれても顔を合はせて話しつゝあるが如し。通信とはかくも面白いものであらうか。

十四時一點の空曇ると見るや武藏野嵐襲來、雨にあらず、雪にあらず、塵埃の雨なり、黄塵の風なり。目をつぶつて行軍しても埃は容赦なく顔をよごし目にあたる。十六時迄やまず。

この埃の中で通信機を開設しようものならもう大へん。然し任務は重し。時間になれば民家の玄關の中や室の中へゴインにお邪魔して開設。外は目もあてられぬ武藏野嵐。然し其の中を電波殿は悠々と通つて相手通信所との間を往復してくれる。かういふと簡單であるがこの時の調整には一寸努力を要した。

二十九日も二十八日のやうな訓練。この日は校長殿が我々の情況を見にこられるので一組は校内に開設。校長殿は直接我々にも色々質問され、我々は「頑張つてやります。自信は相當つきまし

た」と答へた。然り僅か一週間の間に自分ながら驚く程の進歩をしてゐたのである。其の日將校集會所にて高等官と食事を共にしつゝ感想を語りあつたのであるが、最後に校長殿が全將校の前で例をあげて我等を賞め、一段の進軍を希望された時はとても嬉しかった。

三月一、二日は見學にあつたので訓練としては一先づ終り、器材は清潔に手入して返納したが、返納する時何とも言へぬわかれたくない、一種の感傷的な氣持がしたと皆言つてゐる。たつた一週間でも我々と起居を共にしてくれた器材よ、大いに健康であつてくれ。

□食 事

何處の生活に於ても食事と入浴と睡眠は本當に楽しいものである。ましていそがしい程に時間を徹底的に利用する軍隊生活に於て食事の時間のうれしいこと。食事番は三百米の道を往復して食事をつてきてくれる。途中「步調とれツ。頭右ツ」でもかゝつた時はたゞでさへじつとしてゐない桶の中の汁はパチャ／＼はねて騒ぐ。食事番が全部の食事をすゑると「食堂に入れーッ」とわれがねの様な聲が一棟を包む。毎日なか／＼の御馳走である。日直生徒が「氣をつけ」をかけて教官殿に「食事準備終りました」と報告し黙禱を捧げた後皆箸をとる。訓練に熱心なる故また食事のうまいこと。それに「集會所のチャンポンがなくならぬうち」なんて餘計な心配をせずに食べられるから益々おいしい。玄米故少くも三十回は嚙む様に。との御注意あり。

食事の時間のまた賑かなこと。訓練の時には凄く嚴格な教官殿

も食事時間はまるで友達である。明朗瀟灑な生活なり。

福田少佐殿なか／＼話せる。

「食事の時間や入浴の時間は大いに愉快に話すがよい。明朗といふことについては此の學校では特に意を用ひてゐる。思ふに若い者をおさへておいて何も言はせぬでよくこと程危険なことではない。青年には清く明るく何でも語らすべきだ。」

福田少佐殿が話せるなら峰金教官殿はもつと、まして他の助教殿や我等五高生徒においてをやである。自己紹介をやらせると必ず横から陽信混信がとび出す。通信班人氣者のHやSやTは初日にしてその所以を教官殿から覚えられてしまつた。食後また少適に校々歌を習ひ武夫原をうたひ大いに愉快。これに酒があつたらもつと愉快ならんとYが言ひ出したら富山縣出身の若ヶ原軍曹殿曰く「酒を飲む奴をアンボンタンといふ。」と飛電ビシヤリ。

毎日食事の時間の何と明るきこと。或る者曰く「東京は景色がよくて飯は充分いたゞけて風呂には毎日入れて……と言つたら家の連中さぞびつくりすることだらう。」と。三、四日たつと飯の少い所に座る希望者が出來てくる。

生徒食堂で二回、將校集會所で一回の會食もまた愉快なものであつた。少年兵と食事を共にし食後校歌の交誼をやつた時のことがまだ目に殘る。たゞ二十對二百では音量に於て量におされた氣味あつたのは残念。二十九日將集において會食の時はまだ別個の味あり、將校になつた様な氣がして將校と座談し、食後校長殿から感想を聞かれた。三人の代表者が感想をのべたが「事前準備の徹底性。明朗性。しつかりやる時と愉快に騒ぐ時のけじめがよく

ついでゐること。」等をのべた。其後校長殿からお話しがあつたが「諸官は……」と我等に言はれるのでくすぐつたいこと。

三月二日の夕食はまた思ひ出深し。別れの宴ともいへようか特別の御馳走をして下さつて、教官助教殿と共に葡萄酒の盃をあげつゝ、十日間を反省し抱負を語り大いにやつたのである。會費六十六錢の盛大なる通信部コンパとも言へよう。教官殿は書に秀で音楽にうまく熟と意氣に燃えた元氣一ぱいの人であり我等を大いに明朗によく指導して下さいました。

見 學

三月一日稻葉先生のをられた電信隊を見學した。トラックに乗せて有線の機械化構成作業を見學させて頂きつた。始めてみる機械化構成に一驚する、○台の裝甲車よりなる。一番車がゴーツと進撃しつゝ穴をほり電柱を立てゝゆく。二番車が機械で延線しつゝ電柱に線をかけつゝ進みにすゝむ、それ以下の車も補修に建築に超スピードで行動する。人力建築の何倍の能率があることであらう。時速○○料の速度を有するさうだ。約二軒架線した時に通信機開設、電信電話の送受を我等にもやらせてもらつた。○○式雙信機の中へ接続して一本の電線で電信、電話双方共同時に○系の通信が出来るといふことである。部隊食堂で中食をとる。この部隊の防空戦闘偽裝の周到なることにまた一驚した。

十四時から相模原の通信學校見學。此處でまた有線機械化構成を見た。今度は我々にも一通りやらせて下さつた。人力と比較して何と機械力の大きなこと。またその小隊長の元氣一ぱいにしめて恰も我等が教官峰金大尉の弟のやうな意氣があることに感激、

熱にひき入れられた。次に傳書鳩見學。機械が如何に發達しても傳書鳩の重要性は益々大きくなるばかりといふ。渺々たる海の中の小島の守備に、近い島同志基地同志鳩のはたす連絡の役目もまた重い。日夜を分たぬ鳩訓練がつゞけられてゐる。

通校を去るに當り高津大佐殿の訓示は以て我々の深く反省すべき點を多く含む。

「戦局は愈々重大である。何も至る所で悲觀すべきではないが、我が國は確かに學徒動員に於ておくれた。またアメリカの學生の生活を見る時我々の深く考ふべき所がある。彼等は自由主義とはいはれてゐても、團體生活は實によく守る。キャンプ其他に於てキャンプの命令には殆んど日本の軍隊と同じ程絶対服従してゐる。彼等は軍隊に入る前から既に規律になれてゐる。日本の學徒の以て反省すべき所である。諸君等が自發的に通信に精進し頑張つてをると聞き誠に喜ばしい限りであるが、現代戦は實に電波戦と呼ばれる程電波は口であり、耳でありまた眼である。大いに努力してくれ。また情勢の如何によつては諸君に學帽のまゝ出陣して貰はねばならぬこともあるかも知れない。」

我々大いに反省すべきである。

歸途は少通校のトラック三台に分乗して相模原の軍用道路を全速力ですつとばして歸校。またとない快適なドライブであつた。トラック上で少年兵とうちとけまたトラック間では手で視號通信をやり「サムクナイカ」「オマヘ」「ソカゼ」「ヒクナ」等の信號を光波に託しつゝ、トラックは八王子をまはり立川を過ぎ須臾の間に四、五十軒を飛ばして少通校着。

三月二日は午前通信官吏練習所見學。待たされること數時間。キビ／＼した生活に慣れて來た我等にとつてはこの間の死節時が特にうんざりした。有無線器具について一通りの説明を聞いたが何も新しいことはなかつた。

午後放送會館見學。一步出れば電車の音、自動車の音喧噪であるのに一步内へ入れば何とまた靜かなことであらふ。然り、此處は完全な音響遮蔽装置をした謂はゞ宙に浮いてゐる建物である。

第一第二演奏室からラヂオ体操の放送室まで限なく案内、詳しく説明される。また調整室、録音室を見せて貰つて説明を開いたが流石日本の中央放送局であると感心させられる。調整室ではあらゆる演奏を講演を報道をたゞ電流の微少な變化にあらはして、メーターを覗きつゝ一心に調整する技術者の熱が火花を散らしてゐる。録音室では圖盤、トーンキー、電磁三式の録音機の原理と用途を説明してゐたゞいてゐる中にも、従業員は手入に用意に忙しい。然り、こゝは一分一秒もたがへず時間を嚴守すべき殿堂である。

十四時四十分から三十分。放送の實況を見學させて貰つた。對米短波放送である。魅々たるアヴェ・マリアの曲に始る。演奏者は第二世の山本メリー嬢を主とする一大管絃樂團。聲一つ立てず見學席のガラスから見てゐる中に演奏者の熱に自ら感激してゐる。ヴァイオリン弾きなんて大した者ではないと思つてゐた謬見を正されてきた。熱心になつた有様は眞にすごいものでたら／＼流れる汗水をふき／＼ヴァイオリンに全精神をうちこんで弾いてゐる演奏者の姿には頭が下る思ひがした。其日夕食の時教官殿も

言はれたが、「何事にしろ熱情をうちこんでやれば自ら神に通ずるものである。今日の放送實況でもあの第二世のヴァイオリン手の熱心に感心した。」と話された。ついで英語のニュースが始る。これが實際は一番重要であらう。此處での音波はマイクを通じて微少な電流となり増幅され川口に至り發振所の振動電流を變調し更に増幅され空中線から出た電波は太平洋を飛び越して敵米の受信機に喰ひ込むのである。宣傳戦にも斷じて勝たねばならぬ。今我が國の海外放送陣は一日延べ五十數時間の宣傳戦を展開してゐるのである。

交 驛

少通校生活は實に明朗にして元氣潑刺たるものである。生徒の顔も皆明るい。

二十七日夜同郷出身の少年兵との懇談會あり。九州出身は量に於ても實に於ても少通校の中で相當の勢力を有するさうである。

顔こそ知らねすぐうちとけた。畫津湖畔の出身になる一少年兵の話に端を發して、終に教官峰金大尉殿の許可を得て、生徒集會所に一回武夫原を亂舞して度膽を抜いた。教官殿「やれ／＼ッ」と言つて下さるし實際有難い。軍隊の中で教官の許可を得てやつた等と言つたら友はあいた口がふさがらぬだろう。それ以後俄然打解け度は急上昇し少年兵からも詩吟をやる、歌をやる、東條さんの眞似をする。……で大いに愉快な夜であつた。

また何時の日か戦線にて相見ることあらん。しつかり頑張つてくれ。俺達も張切るぞと言ひ交しつゝ別れた。

逸 話

凡そ明朗な生活にもさうでない生活にも失敗やヘマはつきものである。たゞ前者に於てはそれが思ひ出深き逸話になることがよくい。

(1) むすめ

峰金教官殿は送信の理論説明の時には何時も「発生した△△k.c.の娘を發振増幅して立派な乙女にして空中線にのせてお嫁にやるのだ。」と説明されるのを常とした。或日大型無線機見學の時増幅部を指して「これは何か知つとるか」と聞かれたY君、「ハイッ。あの——ドモツテ(むすめ)ではなかつた、電波を大きくする所でありまッ。」

翌日「教官殿にはお子さんは何人ありますか」と聞いたら「今年六ツの娘がある。」……。

(2) 畑

或る日演習がおそくなつて入浴時間を特に延長して貰つたことがあつた。熊本とは三十分以上の時差あり十九時といへば眞暗である。三百米を駆足で浴場へ。途中道を間違へて引率の日直生徒が石につまづいて折もあし、壕内に轉落。ついで三四人重りあふ。しまつたと思ひつゝやつとはねおきて浴場の燈を目標に直線前進。途中馬鹿に土が柔いと思つたら翌朝聞く所によれば畑をふみあらしてゐたさうでさんぐ叱られた。

(3) 宣傳失敗

「教官殿、映畫會社の人を知つてをられませんか。」スーパの異名をもつTが言ふ。

「知つとるぞ。東寶にも日映にも松竹にも俺の知つた奴がある。」

見學に行きたいか。」

「いや。日本ニュースに撮つていたゞきたいのであります。」

「うん。俺もさう思ふがそれだけは準備不足で手遅れだ。報道部の許可がないと映畫撮影は出来ぬことになつてゐるし許可を得るには一ヶ月はかゝる。」

放送會館見學の時また彼のスーパヘテロダインは発生した。五分間位感想を放送出来ませんか。」

他の者が呆れてゐる中に峰金教官殿はどうかして實行させたいと録音の係に交渉を始められた。然しこゝでもまた

「報道部の許可がないとできません。許可を得るには一週間ばかり前から頼んでおくことです。」……。

別離

三月三日我々の訓練は終つて我々は離校することになった。器材の返納。諸貸與官給品の返納、室の大掃除。今日も目まぐるしい程忙しくはあるが今迄の忙しさとちがつて何かさびしいものである。室も完全に整理して塵一つ残さず、そして内務班の室を去る時何かしら歸りたくない氣持に襲はれた。

校長殿は東京迄出張中の所我々の申告をうける爲特にその時間自動車で歸つて下さつた。

「自分等五高通信訓練班生徒二十名へ去ル二月二十三日ヨリ東京陸軍少年通信兵學校ニ分遣ヲ命ゼラレ宿泊訓練中ノ所本三月三日異狀ナク訓練ヲ終了シマシタ。コノ間校長殿始メ諸教官殿ハ周到ナル事前準備ノ下徹底的ナ訓練ヲシテ、自分等ヲシテ充分ナル自信ヲ得シメテ下サイマシタ。マダ嚴肅ナ軍紀ノ下内務ハ自分達ノ

生活ニ大ナル光ヲ與ヘマシタ。自分等ハ歸校後必ズコノヤウニ頑張り先頭ニ立ツテ校風ヲ刷新シマス。最後ニ國軍通信ノ飛躍的向上ヲ祈念スルト共ニ校長殿始メ諸教官殿ノ御健康ヲ祈リ致シマス。ココニ謹ンデ申告致シマス。」

眼の玉一つ動かさず申告する日直生徒に校長殿はまた瞬き一つせず眞剣に申告をうけられた。別れに望んでの訓示

「期間は短かゝつたが皆大いに取切つてくれ本當に教育者と被教育者の熱と熱がぶつかりあつた意義深い期間であつた。皆學校を出たら營門をくぐる人ばかりである。或はもつと逼迫したら學帽のまゝ出られることがあるかも知れない。科學戰に、特に電波戰に於て諸子に對する期待また大なるものがある。歸校後も自軍大いに頑張つてもらひたい。」

少通校々歌を唱ひつゝ校門を出づ。振りかへれば校門は來た時とかはらず新しく「また來てくれ。」と叫んでゐる。少通校の萬歳を三唱して別れた。何か泣き出したいやうな衝動を覺える。

電車の停留場迄教官殿、助教殿は送つてきて下さつた。本當に十日間起居を共にして陰に陽にお世話になつた教官殿との別れはつらい。途中堂々たる行進。「武夫原」を軍歌として歌ひながら電車の驛迄來た。これも我等が嚆矢であらう。

電車線路は相當長く一直線である。一番後に乗つて互に見えなくなるまで手を振りあつてゐた。懐しき少通校去らばよ。

十五年創立以來、十六年には部長稻葉先生を聖戰場にお送りして、其の後殆んど生徒の意氣により運営し熱により發展して來た

通信部は今回諸先生の御理解と、軍當局の非常なる御援助により無事少通宿泊訓練といふ學徒としても始めてのことをさせていただくことが出來、更に邊しく育つて行く。

三月二日宮城前で軍人勅諭全文を奉唱したのであるが其時のあの感激といふか日本人に生れた喜にふるへた胸の鼓動は永久に忘れることが出來ない。あゝ御民われ生けるしるしあり。我等學徒生ける驗あり。

最後に本訓練に援助をよせられた當局始學校の諸教官殿、諸先生方に深く感謝しつゝ筆を擱く。——三、一〇——

短歌班報

文二甲二 石 丸 公

去年の六月、短歌班を創設して以來はや一年に近い月日は流れた。その間上田教授を班長に、松本教授を指導教授にいただき我我十數名の班員は、遅々たる歩みながらも精進を重ねてきた。學校の行事その他の都合により週二回の研修も満足に行ふことは出來なかつたが、抒情精神をいくらかなりとも得たとは言へると思ふ。

短歌は日本民族とともに成長し發展してきた日本特有の抒情詩であつてその本源は生物通有の表出活動にあるのである。表出活動——それは生命に直接であり、本源的である。この表出活動そのものは實に生命の重要な一面であつて、生命に附屬してゐる